慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福澤諭吉と兆民・辰猪：明治思想史研究序説
Sub Title	
Author	飯田, 鼎(Iida, Kanae)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1997
Jtitle	近代日本研究 Vol.14, (1997.) ,p.79- 111
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19970000-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第十四巻（一九九七年）

福澤諭吉と兆民・辰猪

――明治思想史研究序説――

飯田　鼎

一、明治十年代の思想家像

明治十年代にはじまるいわゆる自由民権運動を考える場合、その思想的潮流という点からすると、当然、福澤諭吉と中江兆民および馬場辰猪という三人の巨人に出あうであろう。だがこの三人の思想家のうち、前者は、自由民権のはげしい流れのなかに直接、身を挺して活動したのではなく、この運動の原理的な要素について、運動家たちを啓蒙し、彼らに活力をあたえ、みずからは教育事業やジャーナリズムでのはなばなしい活躍を通じて、世人に衝撃をあたえたものであるということができる。

しかしこの三人の明治の思想家は、一方は「東洋のヴォルテール」、他方は「東洋のルソー」に擬せられ、ま

た馬場辰猪は革命的な民権論者として、啓蒙家として密接な関係を保ちながら、きわめて対照的な存在として、それぞれその活動によって、当時の世論に深刻な影響を与えた。とりわけ福澤より一世代遅れて登場した中江兆民と馬場辰猪は、一方はフランス民権運動研究の成果をひっさげて、他方はイギリス自由主義の精神を体得して、明治十年代初頭の政治運動に活躍し、憲政史上に不朽の足跡を印した。明治思想史に志す者にとって忘れがたいのは、まず第一にこの三人の巨匠の知識人としての生き方の差異であろう。そして第二に、そうした行動を大きく規定した条件のひとつとして、外国での生活体験の相違からする時代認識がある。そして第三に、この三人の独創的な思想家が、後世に遺したもの、そしてわれわれに強い影響を与えているものは、一体何か、ということであろう。この最後の問題は、恰も幕末・維新という革命的動乱に様似たる二十世紀末の現代に生きるわれわれが、いま何故に、この三人の思想家から学ばなければならないか、そして三人の巨人の生涯のなかから、今日のわれわれに資すべきものは一体何であるのかを追求することにもかかわっている。

福澤諭吉と中江兆民および馬場辰猪は、まさしく同時代人である。しかし同世代人ではなかった。それは丁度、第二次世界大戦中の体験を基準に、戦前派、戦中派および戦後派とした場合、戦中派と戦後派は、しばしば同時代人ではあっても同世代人ではないのと似ている。

福澤諭吉は、天保五（一八三五）年十二月十二日（新暦では一月十日）大坂にあった中津藩蔵屋敷で生まれた。中江兆民は、弘化四（一八四七）年、十一月十一日（新暦では十二月八日）、高知城下で生まれたので、福澤より十二歳年下ということができる。しかし亡くなった年は、福澤が明治三十四（一九〇一）年二月三日、兆民は十カ月程おくれて十二月十三日であったことからすれば、二人は同時代人であることは間違いない。しかし繰り返すが、同時代人ではあっても同世代の人ではないということである。

福澤と中江ほど類似した経歴をもち、共通とも考えられる体験をした者は少ないであろう。『福翁自伝』に物語られているように、諭吉の父、百助は、「ヤット藩主に定式の謁見が出来ると云ふのですから、足軽よりは数等宜しいけれども、士族中の下級、今日で云へば先づ判任官の家」[1]という程度の下級武士であった。一方、兆民の父、元助は足軽で、兆民の生まれる前年の弘化四年、江戸方下横目役を命じられている。下横目役とは、今日の下級警察官で、つまり兆民は土佐藩の巡査か巡査部長クラスの息子として生まれたということになろう。[2]

諭吉の父百助の職務は、御廻米方といわれ、中津から船で大阪に送られてくる藩米を、いわゆる札差しと称せられた金融業者を通じて現金化し、藩の財政を司どる会計係の地位にあり、その俸禄は十三石二人扶持であった。兆民の曽祖父伝作は、明和三（一七六六）年、下二人扶持、切米四石の足軽に召しかかえられたというから、福澤家と同じく下級武士であり、その生活ぶりは大体において想像がつくであろう。

諭吉の父百助は、天保七年、彼が三歳のとき、脳出血で四十五歳の若さで病没したが、兆民の父も、文久元年、彼が十五歳のとき病死している。若くして父を失ったという点でも共通しているが、何といっても興味深いのは、諭吉は、安政元（一八五四）年、兄三之助に伴われて蘭学修業のため長崎に赴いていることである。兆民もやはり洋学を学ぶため、慶応元（一八六五）年、長崎派遣を命じられている。諭吉は、長崎では幸運に恵まれず、やがて大坂で緒方洪庵の適塾に学び、蘭学者としての途を辿るのであるが、兆民はフランス語を学んだ。門下生として兆民を敬愛した幸徳秋水は、つぎのように書いている。

「先生、十七、八歳始めて洋学に志し、萩原三圭先生、細川潤次郎先生に就て和蘭の書を学び、慶應元年十九歳にして、高知藩留学生となり長崎に游び、平井義十郎先生に就て、始めて佛蘭西学を脩めたり。

当時、長崎の地は、獨り西欧文明の中心として、書生の留学する者多きのみならず、故坂本龍馬君等の組織する所の海援隊、亦運動の根據を此地に置き、土佐藩士の来往極めて頻繁なりき」[3]。

兆民は坂本龍馬からかなり深い感化をえたと思われるが、福澤諭吉と中江兆民について興味深いのは、この両者の海外渡航および留学の経緯である。

福澤が、軍艦奉行木村摂津守喜毅（芥舟）の従僕の形で、一八六〇（万延元）年、咸臨丸で渡航する機会を得たのは、摂津守の姉が、福澤の親しく出入していた蘭法医桂川甫周国興の夫人であったのを幸いに、福澤が甫周に頼み込んで木村の了解をえたという件りは、『福翁自伝』にくわしく物語られている。福澤のこの機敏な行動と才覚は天性のものであったが、兆民もまた、外国留学にあたって、福澤に劣らず奇抜な行動に出たのであった。長崎に滞在すること二年、江戸遊学の志を抱き、後藤象二郎の援助により江戸に赴き、当時、福地源一郎が開いていた英学塾日新社に通学、語学の研鑽に努めたが、どうしても外国留学の夢を捨てることはできない。そこで大久保利通に直訴に及ぶのである。幸徳はつづける。

「先生久しく外遊の志を抱き、故大久保利通公に謁して謂ふ所あらんとす。閽人先生が蓬頭垢衣の寒措大なるを見て、拒んで容れず、先生乃ち日々衙門の前に遊びて、公の馬丁と親狎し、其退廳に乗じ、車後に附攀して往く。公、車を下るや、急に進んで刺を通じ、坐に延かるゝを得たり」[4]。

ようやくにして大久保に接見しえた兆民は、その志をのべた。「先生乃ち政府の海外留学を命ずる、之を官立学

校の生徒に限るの非を論じ、自ら其学術優等にして、内国に在て、就くべきの師なく読むべきの書なきを説きて、其選抜を乞ひ、且つ曰く、同じく是れ国民にして、同じく是れ国家の薦め也、何ぞ其出身の官と私とを問はんやと」。

兆民はすでに後藤象二郎の知遇は得ていたが、大久保の推薦によって板垣退助に紹介され、司法省出仕となり、フランス留学を命じられることとなった。重要なことは、兆民がこれを契機として、明治自由民権運動に圧倒的な役割を果した板垣を識り、その推挙により、フランス遊学の夢を果したことと、いまひとつ彼の留学先が、たとえば同じ土佐出身の馬場辰猪のようにイギリスではなく、フランスであったことであろう。このことが、後にみるように、自由民権運動における兆民と辰猪の行動様式に何程かの影響をあたえたことも考えられる。兆民のこのような板垣との関係とフランスでの西洋文明の洗礼、とりわけ民権思想の体得は、彼の思想と運動、さらに人生観を決定的にしたと云っても過言ではなかろう。

中津奥平藩の下級士族の二男、福澤諭吉は、緒方塾で塾長を経験し、安政五（一八五八）年、藩の命令により、築地鉄砲洲に蘭学塾を開き、藩の子弟を教育することになったが、間もなく、オランダ語が国際語ではないことを知り、蘭学塾を英学塾に転換させることとなった。

その後、彼は中津藩出身の幕臣として、反訳方として仕えるが、万延元（一八六〇）年の渡米以後、文久二（一八六二）年の遣欧使節の一員としてのヨーロッパ六ケ国への渡航、そしてその後、一八六七（慶応三）年、小野友五郎を主席とする幕府軍艦受領のための使節一行に参加するという、都合三回の渡航は、職務上のヨーロッパ渡航であって、いわゆる遊学あるいは留学とは全く性格の異なるものであった。いわば、アンシャン・レジームのなかで近代化に乗り出そうとする幕府政権が、開国に向けて国の進路の梶を大きく転回しつつあったま

さにそのときに、福澤は、その卓抜な識見と洞察力によってヨーロッパの社会と文化を理解し、日本の行くべき道筋を模索したのであった。その『西洋事情初編』をはじめ、『学問のすゝめ』および『文明論之概略』は、そうした福澤の思想的な格闘の賜物であって、後の世に大きな影響をあたえた。

同じヨーロッパ文明の研究に志したとはいえ、兆民の場合は福澤とは異なっていた。ここで世代の差異が、二人の思想と行動を大きく制約する。福澤がヨーロッパの市民社会に接し大きな衝撃をうけたのは、幕府政権が、万延元（一八六〇）年水戸浪士による大老井伊直弼暗殺によって、大きく動揺しつつあった頃、二十七歳のときであった。兆民が外国留学を志し、大久保の推薦と板垣および後藤象二郎の斡旋によって、司法省出仕となり、フランス留学（法律修業）を命じられて、岩倉全権大使一行とともに、明治四（一八七一）年、横浜を出帆したのは、彼が二十五歳のときであった。年齢としてみればともに二十歳台の後半にヨーロッパ文明を体験したことになり、うけた衝撃のはげしさには相当なものがあったろうと考えられる。

福澤の立場からすれば、日本が開国の方向に向うのか、それとも依然として鎖国政策を固守しようとするのか、甚だ不透明な時代で、たとえば文久遣欧使節の使命も、江戸および大阪、兵庫および新潟の開市開港延期にあったという点からしても、その時代の雰囲気を推察できるであろう。だが、それから十年程経った一八七一（明治四）年、岩倉使節団とともに欧米に赴く機会を得た兆民にとっては、明治維新政府は、いわゆる開明専制の政権であったとはいえ、その政府の中枢を成す者は、兆民の恩人のひとりともいうべき大久保利通であり、郷土の先輩、板垣退助等であった。福澤にとっては、行方定めぬ不安定な幕府政権が、日本の将来にどのようなヴィジョンを抱いて、新しい国家を構想していたか、充分に見当をつけることができなかったのにたいし、兆民の前に急角度に展開しつつある維新の変革は、ヨーロッパ先進国をモデルとする近代化を目指すものであることは、誰の

眼にも疑いなかった。おそらく兆民も、福澤が一八六六（慶応二）年以来、精力的に書きつづけた『西洋事情』（初編、外編および二編）を読み、影響をうけた一人であったろう。

福澤諭吉は、日本近代の夜明けに当って、もっとも早い時期にヨーロッパ市民社会の実相に触れ、その本質を理解すべく奮闘したのであり、その意味で来るべき明治維新の到来を予知し、民衆のためにその精神的な準備を整えることを、慶應義塾を中心とする教育事業と旺盛な著作活動によって訴えつづけたのであった。

だが、中江篤介が前途有益な青年として活動を開始すべく立ち現われた時代は、すでに維新の変革はその緒につき、日本近代化の方向は確定し、その意味で日本近代国家の建設事業は、着々と進行しつつあった。すなわち兆民が渡欧した明治四年には、政府は廃藩置県を断行し、また文部省を置いて中央集権体制に応ずる義務教育体系の確立を急いでいた。また明治六年には全国徴兵令を発布し、国民皆兵を宣言した。同時に近代国家としての財政的基盤を整備すべく、地租改正を強行、いわば疾風怒濤の勢いで、明治の変革は推進されつつあったのである。これらの革命的ともいうべき変革は、実に兆民が、アメリカ合衆国を経てフランスに渡り、そこでの研鑽を終えて、明治七（一八七四）年、二十八歳の四月、マルセイユを出帆し、六月に帰国するまでの間に行われたのであり、兆民の帰国直前の一月、板垣退助等は、民撰議院設立建白書を政府に提出している。

幕末動乱のなかで、来るべき日本の前途に大きな不安を抱いていた福澤諭吉は、こうした変革が、〝上からの革命〟として行われる直前、薩摩・長州の尊王攘夷を呼号して、洋学者を敵視していた下層武士が政権を担うと考え、一時、日本の将来に絶望した時期があった。自叙伝にはつぎのように物語られている。

「私は酷（ひど）く政府を嫌ふやうにあるけれども、其真実の大本を云へば、前に申した通ドウしても今度の明治

政府は古風一天張りの攘夷政府と思込んで仕舞たからである。攘夷は私の何より嫌ひな事で、コンナ始末では假令ひ政府は替っても迚も国は持てない、大切な日本国を滅茶苦茶にして仕舞ふだろうと本当に爾う思た所が、後に至て其政府が段々文明開花の道に進んで今日に及んだと云ふのは、実に難有い目出たい次第であるが、其目出たかろうと云ふことが私には始めから測量が出来ずに、唯其時に現れた実の有様に値を付けて、コンナ古臭い攘夷政府を造て馬鹿なことを働いて居る諸藩の分らず屋は、国を亡ぼし兼ねぬ奴等ぢゃと思て、身は政府に近づかずに、唯日本に居て何か勉めて見やうと安心決定したことである」(5)。

たしかに明治初年の情況からすれば、依然として幕府時代の弊風が遺っていたことは疑いえない。明治三十年代、その最晩年に往時を追懐して語った明治政権の頼り無さ、外国人に軽侮された島国根性に絶望した福澤に対して、同時代人としての中江兆民は等しく幕末維新の慌しい雰囲気のなかに身をおきながら、この新しい時代の到来に、ある種のいらだちと焦燥感をもっていたのではなかろうか。

『西洋事情』につづいて、「国民の教科書」として、明治思想形成に決定的な影響をあたえた『学問のすゝめ』が発刊される一年前、明治四(一八七一)年、いわゆる安政の不平等条約の改正を課題として、岩倉使節団が派遣されたが、この一行に便乗してフランス留学に出発した兆民にとって、ヨーロッパはどのようなものとして把握されたのであろうか。福澤の場合には、一八六二(文久二)年、幕府文久遣欧使節の一員、反訳方としてヨーロッパ六ヶ国に渡航した際、日記として『西航記』、さらに覚え書きともいうべき『西航手帖』を作成していたため、幕末のヨーロッパ市民社会の断面が鮮かに描き出されているが、兆民は、フランス留学時代のヨーロッパ社会について、自己の留学体験を通じてほとんど何も語っていない。兆民の門下生、幸徳秋水(伝次郎)が、彼

の語った体験談を素材に、つぎのように記しているものがあるのみである。

明治四年、フランスに留学した二十五歳の兆民は、そこでどのようにして過したのであろうか。

「先生が佛国留学中の事、親しく其詳細を叩くに違あらざりしは、今に於て予の深く遺憾とする所也、但だ予は、先生が、先ず小学校に入れるを聞けり、而して兒童の喧騒に堪へずして、幾くもなくして去り、里昂の某状師に就て、学べるを聞けり。先生が司法省の派遣する所たりしに拘らず、専ら哲学、史学、文学を研鑽したることを聞けり、其渉獵せる史籍の該博なりしを聞けり、而して其帰朝や、當時我政府が一切の留学生を召還するの議ありて、先生も亦其中に在り、而して佛国の教師、先生の才を惜みて、資を給して止まらしめんと云ふや、先生意頗る動けるも、而も母堂の老いて門に倚るを思ふて、他年風樹の嘆あらんことを慮り、竟に帰途に就けるものなるを聞けり、予の知る所、如此き耳。(6)」

福澤にとっては、維新政府が、「段々文明開花の道に進んで今日に及んだ」と考えられた明治の変革が、兆民にとっては、近代化の方向を目指しているとはいえ、西欧の文明国家とは違った異質のものになっていくのではないか、という危惧の念を深く抱き、「維新のやり直し」、すなわち新しい革命を志していた時期があった。このような対照的な福澤と兆民との思想の差異は、ひとしく同時代人として幕末・維新を生き抜きながら、同世人ではなかったことに大きくよっている。そしてこうした感慨は、兆民の同世代人馬場辰猪も深く抱いたところであった。

（1）『福翁自伝』、慶應義塾編纂、『福澤諭吉全集』第七巻、七頁。
（2）松永昌三『中江兆民』、岩波書店、一九九三年、二頁。
（3）幸徳秋水「兆民先生」幸徳秋水全集編集委員会編『幸徳秋水全集』第八巻、明治文献、昭和四十七年、二九頁。
（4）前掲、三一～三二頁。兆民と福澤についての興味深い論稿として、井田進也「東洋のヴォルテールとルソー――福澤諭吉と中江兆民――」福澤諭吉協会編『福澤諭吉年鑑』19、一九九二年、所収をみよ。
（5）『福翁自伝』、『全集』第七巻、一六〇頁。
（6）幸徳秋水「兆民先生」、前掲、三二～三三頁。

二、フランス民権と中江兆民

幸徳秋水の伝えるところによれば、兆民はフランスより帰国後、明治政府の政策に失望し、維新の変革を中途で終らせることなく、フランスにみるように、徹底的に推し進めることに熱い関心をもっていた。

「先生が平生如何に革命家たる資質を有せしかは、左の一話を以て知るべし。先生佛国より帰りて幾くもなく、著す所の一篇を袖にし、故勝海舟翁に依り、嶋津久光公に謁せんことを求む。勝翁即ち海江田信義君を介して、冊子を公に獻ぜしむ。後数日公召す。先生拝伏して曰く、嚮日獻する所の鄙著清覧を賜へりや否や。公曰く、一閲を経たり。先生曰く、鄙見幸に採擇せらるゝを得ば幸甚なり。公曰く、足下の論甚だ佳し、只だ之を実行するの難き耳と。先生乃ち進で曰く、何の難きことか之れ有らん。今や陸軍中乱を思ふ者多し、西郷にして来る、響の應ずる如くならんと。

公曰く、予召すと雖も、隆盛命に応ぜざるを奈何。先生曰く、勝安房を遣して以て説かしめよ、西郷必ず諾せんと。公沈思之を久して曰く、更に熟慮すべしと。先生乃ち辞し還れりと云ふ。先生の過激の策を好む、概ね此類也、故に他年皆な先生を忌憚し、然らざれば則ち、徒らに奇矯の言を為すとして排せられたりき」(7)。

フランスで活発に展開されていた革命運動と、その思想から深い影響をうけて帰国したことは理解できる。ではその『策論』とは一体、どのような内容を成していたのであろうか。

現在、『中江兆民全集』第一巻に収められている〔策論〕は、本全集の編集者で解説者でもある松永昌三氏の解題によれば、この文書は、松永氏が、一九七六（昭和五十一）年、古書展で購入したもので、「冒頭部分（おそらく和紙一枚分）が欠如していた」が、末尾に「元老院権少書記官中江篤介昧死献言」という署名があり、さきに掲げた幸徳の『兆民先生』のなかにふれられている「策論」と同一のものであると推定される。また、「著す所の策論一篇を袖にし、故勝海舟翁に依り、嶋津久光公に謁せんことを求む」とあるが、これは勝がその日記に、明治八年八月二十二日の項として、「中井篤介、海江田氏へ紹介認め遣わす」と記されていることと符合する(8)。さらに、同年九月十八日の欄に、「中井得介、過日左府公〔島津久光〕へ逢い候旨申し聞く」とあるが、ここで「中井得介」とは「中江篤介」の誤まりであると思われる。

ともあれ、これによって中江兆民が草した〔策論〕が、島津久光に届けられたことは確認できる。ところでその内容であるが、さきの松永昌三氏の解説にあるように、冒頭の部分が欠如しているとはいえ、全体を精読すれば彼が日本の将来について、何を憂え何を為すべきかを訴えているかは読みとることができる。この〔策論〕は、第一策から第七策までで、はじめに、前文が掲げられ、欠如した部分は除き、要所を拾い出してみよう。これは、

その時点で日本が直面している困難な問題とは何であり、何故に、このような事態に立ち到ったのかという兆民による抗議と憤激の提言である。

「……今日ニ至テハ我物貨漸ク腐陳ニ属シテ顧ミザルニ至リ、以テ減出ノ弊ヲ来タス、是レ天下竭乏ノ患ヲ致ス所ノ因ニナリ、維新以後諸省ヲ開キ府県ヲ起シ主長ニ附スルニ幾ンド独制ノ権ヲ以テセシヨリ、饑寒ノ士貪縁シテ進ミ請囑シテ入リ、此処ニ黜ケラルレバ彼処ニ趨リ、竟ニ諸庁ニ塡咽ス、事疎ニ人繁ニシテ徒ニ紛擾曼衍ノ害ヲ生ズ、而シテ此輩固ヨリ方正ノ士ニ非ラズ、乃チ其獲ル所ハ挙ゲテ之ヲ婦女醪肉ノ間ニ棄テ以テ徒費ノ弊ヲ来タス、是レ天下竭乏ノ患ヲ致ス所ノ因三ナリ、吁嗟人薄ニ財乏フシテ而テ衰滅セザル者ハ未之レ有ラズ、斯二患有テ而テ其因ル所ヲ明カニセズ、猶且樸樕ノ智ヲ挾サミ、苟簡ノ計ヲ恃ミ以テ之ヲ救ハント欲ス、亦己惑ヘリ、然リト雖モ我邦今日ノ形勢ノ若キハ世未之ヲ見ズ、若シ旧俗ヲ守リ古風ニ安ンゼント欲セバ則チ己ム、苟モ作興スル所有ラント欲セバ、二患ノ因ル所悉ク除ク可ラズシテ而テ患ハ則チ全ク救ハザル可ラズ。吁嗟嗚噫天下復此レヨリ難キコト有ラン哉」(9)。

この慨世の文章は、著者兆民が「元老院権少書記官中江篤介」と署名しているところからすると、彼がその任にあった一八七五（明治八）年五月から、一八七七（明治十）年一月までの間に執筆されたものであると、解説者はのべている。明治八年といえば、福澤諭吉が、三年前の明治五年二月、空前のベスト・セラーとなった『学問のすゝめ・初編』を初刊、さらにこれにつづいて、畢生の大作『文明論之概略』が公刊された年に当っている。兆民がこれらの福澤の諸著作に親しみ、その行動から影響をうけたであろうと思われるのは、はるかに後のこと

であった。明治二十年刊行の『三酔人経論問答』のなかに現われる南海先生の言論のなかに、福澤の影をみることからも明らかであるが、それにしてもこの文章のはらむ兆民の思想は、その時代を反映してか、何かきわめて激越なものを感じさせよう。

明治二（一八六九）年に、薩長土肥の四藩侯によってはじめられた版籍奉還は、やがて明治四年七月、廃藩置県の詔書発布となり、維新政府は、行政改革の重要な課題にとり組むこととなったが、こうした革命的ともいうべき封建的諸制度の廃絶は、武士階級の社会経済的基盤を震撼し、新政府に対する抗議と抵抗運動ともいうべき旧武士層の叛乱、すなわち明治七年二月、江藤新平を主謀者とする佐賀の乱、明治九年十月、熊本、神風連の乱、つづいて同月、秋月の乱が勃発、鎮圧されたとはいえ、天下に大きな衝撃をあたえた。そしてこうした不平武士層による叛乱の結着ともいうべきものこそ、明治十年の西南戦争であった。

明治七年に執筆されたこの〔策論〕は、新しい日本の直面している問題を、「天下竭乏（けつぼう）ノ患ヲ致ス所ノ国」として三つをあげているが、さきにのべたように、冒頭の文章が欠如しているため、第二と第三の因のみがのべられていることに注目しよう。兆民のいわゆる「天下竭乏ノ国」のひとつは、「今日ニ至テハ我物貨漸ク腐陳ニ属シテ顧ミザルニ至リ、以テ減出ノ弊ヲ来タス」とあるように、貿易の輸入超過にともなう国内経済の停滞であろう。そして第二には、人事の不適切、諸官庁が独裁的な権力者によって運営されている結果、縁故などの情実による人事採用が公然と行われ、無能で無責任な輩が横行すると嘆いている。「事疎ニ人繁ニシテ徒ニ紛擾曼衍（ふんじょうまんえん）の害ヲ生ズ、而シテ此輩固ヨリ方正ノ士ニ非ラズ、乃（すなわ）チ其獲ル所ハ挙ゲテ之ヲ婦女醪肉（ろうにく）ノ間ニ乗テ以テ徒費ノ弊ヲ来タス」とのべているのはそれである。しかしそれにしても兆民は何故にかくも好んで難解な文字を使うのであろうか。たんに青年客気の衒学的な発想からだけであろうか。

たとえば、「夤縁」という言葉は、「よりすがる」、あるいは、「手づるを求めて立身をはかる」という意味であるが、今日では勿論、明治初期の頃でも、平凡な表現とは云い難い。また、「婦女醪肉」という表現であるが、醪とは、辞書によれば、いわゆる「どぶろく」のことで、要するに通俗的な意味としては、「酒と女」と云うことである。それほど平易な文字を使わなくても、同義語として、「酒池肉林」という言葉がある。または「樸樕ノ智」の樸樕とは、「小さな木」を意味し、転じて小人物、すなわち凡人ということである。このように考えると、兆民は、好んで厳格に意義を規定して漢字を使い、福澤諭吉が積極的に平仮名を使って漢文調を用いず、平明な文章を草したのとは実に対照的である。漢学を教養の基礎において洋学を修めたこの二人の巨人が、その思想の表明ともいうべき文章表現において、何故にかくも隔絶した態度をとったのであろうか。

云うまでもなく、福澤の場合には啓蒙家として、ヨーロッパ社会や思想の民衆への伝達と普及および西洋の学問教育の観点から、平易に文章を叙述することが、もっとも効果的であると考えたからにほかならない。勿論、福澤は、その『自伝』で物語っているように、漢学を白石照山に学び、『春秋左氏伝』を十一回も繰り返し読んだという体験からしても、漢学に通暁し、その『文明論之概略』を読めば、豊醇な漢学的教養に裏打ちされていることは読者がもっとも強く印象づけられるところであろう。福澤はいわば天性の啓蒙家であった。しかし彼の思想の特異な点は、漢学的教養に育まれ、知識としてはそこから充分に栄養分を吸収しながら、その世界観ともいうべき儒教にたいしては決定的に対決し、顧るところがなかったということである。と同時に西欧文明の摂取にあたって、その背骨を成すキリスト教にたいしても、少くとも初期のうちは冷淡な態度をとりつづけた。

漢学が二人の教養的基礎を成したは明らかであるが、偶然のことではあるが、兆民が学んだ高谷龍洲は、福澤の故郷豊前中津の出身であった。当時、碩学といわれた帆足萬里に師事したといわれるが、福澤の兄三之助も帆

足の影響をうけたと、『福翁自伝』に語られているところからすると、[10] 漢字的素養としては、福澤と兆民とは兄三之助を媒介として親族関係に近かったのではなかろうか。ただ興味深いことは、兆民が高谷龍洲の済美黌に学んだのは、明治十一（一八七八）年で、彼はすでに三十二歳になっており、さらに間もなく二松学舎の三島中洲の門を叩くのである。明治七（一八七四）年六月、フランスから帰って四年後のことであった。

兆民と諭吉とは、西欧文明の摂取と外国体験において、一方はアメリカおよびイギリス、他方、フランスという差異において対照的であったばかりでなく、その教養的基礎としての漢学と洋学との関係においても、独自の境地に達していた。福澤も兆民と同じく、ヨーロッパの言語を邦訳する場合、豊富な漢字の大海から借りなければならなかったし、ヨーロッパから輸入されて、しかし実体としては日本において成熟していない概念、すなわち、「社会」や「権利」のような訳語は、福澤等の黎明期の英学研究者による苦心の産物であったが、兆民はそれにとどまらず、ルソーの『社会契約論』を原著の第二巻第六章までを漢訳し、訳者の「解」を付した『民約訳解』に代表されるように、その漢学素養は相当のものがあった。彼は漢文を愛するとともに中国語訳の佛典にも興味をもち、その漢文に現われる佛典には無数の観念的な用語が含まれているため、兆民は、福澤の学問領域にはみられない理学、すなわち哲学の理解に立ち到るのである。やや横道にそれたが、〔策論〕にもどろう。

維新直後の動乱の時代に、福澤は『西洋事情』、『学問のすゝめ』および『文明論之概略』をもって民衆を啓発し、新しい時代に生きる者の心構えを説いて聴かせたが、この〔策論〕を読む限り、この時期の兆民は、明治の変革は、未だ完結せず、継続させられるべきであると考えていたかのようである。第一策のなかに、つぎのように説かれている。

「……然レドモ鄒孟曰ハズヤ、国ノ本ハ家ニ在リ家ノ本ハ身ニ在リ、是故ニ士気ノ殄衰スル、国風ノ澆漓ナル、多クハ帷閨ノ静粛ナラザルニ因ル、……、夫レ妻妾同室ノ天聖ニ悖リ人情ニ背クハ喋々ノ弁ヲ要セズ、曠夫ノ害焉レヨリ出デ怨女ノ禍焉レヨリ生ズ、故ニ方今、文明ト称スル国一モ之ヲ禁ゼザル莫シ。」

要するに、文明国という以上、一夫一婦制を法制化すべきであるという。この点は必ずしも珍らしい見解ではないが、次第に激しさの度を加えていく。

第二策は、人材の登用についての意見である。「今マ人ノ等級を升ボス、専ラ年月ニ由テ才能ニ由ラズ、年月ニ由ル、故ニ頑鈍無恥ノ者常ニ恃ム所有リ、才能ニ由ラズ、故ニ倜儻跅弛ノ士或ハ忍耐ノ心ヲ喪ク、今マ、人ノ職任ヲ転ズルコト奕棋ノ如ク然リ、故ニ遠久ノ策ヲ行ハント欲スル者ハ能ク其能ヲ施ス所無クシテ、而テ縁知多キ者ハ一職ニ居ルコト半歳、甚キハニ、三ケ月ニシテ、其好新ノ心発スレバ輒チ速ニ其択ム所ニ之クヲ得可シ、故ニ曰ク、登升ヲ正フシテ而テ転移ヲ難フス可シ……」。

情実による人事について、兆民がきびしく非難したのは、官吏が国の運命を左右する職にあることを力説していることから、明らかである。第三策においては、学問の振興とともに道義心の衰微を憂慮している。

「父子相愛シ兄弟相親ムハ英佛我レニ賢ル乎、賢ルコトナシ、上下尊卑礼アルハ英佛我レニ賢ル乎、賢ルコト無シ、彼レノ我レニ賢ル所ノ者ハ只、技術ト理論ト有ル而已、技術トハ何ゾ、窮理分析ノ類是レナリ、理論トハ何ゾ、法律経済ノ類是レナリ、……」。

第四策は、貿易および通商政策について、第五策は、殖産興業政策について論じているが、結論的に第六策においてつぎのように云う。

「夫レ我邦士気ノ萎衰今日ヨリ甚キハ無シ、伏水奥羽ノ乱十戦ニ過ギズシテ治シ、肥前ノ変一モ之レニ応ズル者莫シ、此レ豈悉ク人士名儀ヲ重ンズルノ故ナランヤ、亦唯戦ヲ畏ルヽナリ、且綱紀ヲ粛張シテ更革スル所有ラント欲セバ何ゾ一ニ動擾ヲ憂フルニ遑有ラン、臣亦復言フ、断ジテ之ヲ行フニ在ル而已」。[11]

この文章を読む限り、この時期の兆民は、新政府に抵抗する不平士族の叛乱に同情的であるかの如くみえる。しかし議論はともすれば生硬で、後の彼の思想を代表する『三酔人経論問答』や『一年有年』あるいは『平民の目さまし』のように明快ではない。しかしここにはたしかにフランス留学時に体験したであろうパリ・コミューンからうけた深刻な影響が投影している。

幸徳秋水が語っているように、兆民は勝海舟を尊敬し、勝の紹介により島津久光に謁した。その目的は、久光を動かして西郷隆盛にたいし、明治維新の「やり直し」を説得させようとしたかのようである。久光が「足下の論甚だ佳し、只だ之を実行するの難き耳」と答えたのにたいし、兆民が、「何の難きことか之れ有らん。今や陸軍中乱を思ふ者多し、西郷にして来る、響の應ずる如くたらん」と主張したのは、このことを物語っている。西郷は、明治六年、征韓論に破れて故郷の鹿児島に帰り、私学校を経営していた。兆民の期待に応ずるかのように、明治十年、西南戦争が勃発した。しかし結果としては、「明治維新のやり直し」は失敗したのであった。兆民をして、かくまでも、革命を想わしめたものは、一体何であったろうか。

(7) 前掲、「兆民先生」、三七頁。
(8) 『勝海舟全集』、第二十巻、講談社版、「九月十八日」の項、参照。
(9) 中江兆民〔策論〕『中江兆民全集』第一巻、岩波書店、一九八三年、二一～二二頁。
(10) 『福翁自伝』岩波文庫版、二七頁。
(11) 前掲、『兆民全集』第一巻、三二頁。

三、中江兆民と馬場辰猪

幸徳秋水は、兆民のフランス留学時代のパリの情勢について、つぎのように簡潔に記している。

「然れども思へ、當時佛国の状勢たる、新に那勃翁三世敗衂の餘を承け、内は朝野の党争鼎沸の如く、外は保守専制の反動澎湃として来る、而して彼のチェール、ガムベッタの諸英雄、毅然中流の砥柱を以て任じ、民主共和の大義の為めに、一代の智勇辨力を揮ふて、激闘するの状を見る者、誰か血湧き肉躍らざることを得んや、先生の深く此の間に感得する所ありしやを知る可き也」[12]。

パリ・コミューンについてここで詳しく論ずる余裕はないが、要するにナポレオン三世が普佛戦争において、ウィルヘルム一世と宰相オットー・フォン・ビスマルクの率いるプロイセンおよび北ドイツ連邦諸国に敗北し、セダンの要塞は陥落、ナポレオン三世自身が捕虜となるという、実にフランス国民にとっては屈辱的な敗戦となった。

ナポレオン三世の冒険的な戦争の結果に失望し憤激したパリの市民は、プロイセン軍のパリ進入を阻止し、フランスの革命的な伝統を擁護すべく、ティエール政権にたいして抵抗し、一般市民が市民軍を組織し、フランス正規軍との間に死闘を演じた。パリに世界最初に人民による自治政府を誕生させたので、歴史上、パリ・コミューン政権と称せられる。学問的著述というよりは、歴史的な物語り作品ではあるが、故大佛次郎氏の傑作、『パリ燃ゆ』は、この大事件の様相を活寫してまことに興味深い。歴史としてのコミューンについてはこの書にゆずるとして、幸にも兆民はこの世紀の大事件を目撃した数少い日本人のひとりであった。幸徳は、つぎのように続ける。

「先生が佛国に於ける交遊は、西園寺公望侯、故光妙寺三郎、故今村和郎、福田乾一、飯塚納の諸君なりしと云ふ。現に存するの諸君に就て當時の事情を敲かば、極めて興趣あり、且つ有益なるべきを信ずる也」[13]。

注目すべきことは、兆民がパリにおいて西園寺公望を知ったことである。西園寺がフランス留学を志してパリについたのは、明治四年二月七日（西暦一八七一年三月二十七日）のことであった。パリにおいては革命的な事件が進行中で、その真只中に着いたわけである。すなわち、西園寺がパリに到着した前日に、コミューン議会の選挙が行われ、普通のパリ市民のなかから代議員が選ばれ、西園寺が到着した翌日には、パリ市庁舎で共和制にもとづくコミューンの宣言が発せられ、祝典が行われた[14]。

兆民が西園寺の知遇を得たことは、帰国後の彼のジャーナリストとしての活動に密接な関係が形づくられることになるが、しかし兆民は、西園寺よりかなり遅くフランスに着いたので、パリ・コミューンを体験することは

できなかった。年譜によれば、兆民は一八七二（明治五）年、ニューヨークを経てパリに向った。一月十一日にリヨンについて、その半年後の六月十七日、西園寺の下宿を訪れている。これだけでは、西園寺はともかく、兆民はフランスの革命思想にふれる機会はなかったと思われる。では兆民は、どのようにして急進的な革命思想に触れ、その影響をうけたのであろうか。ここでも西園寺のフランスでの生活と関係する。

西園寺は、ソルボンヌ大学へ入学する以前、予備的な勉強ということで、法学者エミール・アコラース（Émile Acollas）の私塾に入った。彼は、急進的な共和主義者で、イタリアの民族主義者ガリバルディとも親交があり、当然ナポレオン三世と対立していた。彼は一八七〇年、スイスのベルン大学のフランス法学教授に就任、翌年パリ・コミューンがおこるや、これを支持した。彼は、コミューン政府が、法学部長に選任したにもかかわらず、逮捕を警戒してパリに帰らず、その後、彼は例の私塾を開いたものと思われる。[15] そこで、西園寺をはじめ、今村和郎、光妙寺三郎、飯塚納および曽禰荒助が学んだが、中江兆民もそこで短期間であったが、フランス語を学んだと思われる。[16]

パリ・コミューンは失敗に終ったけれども、その悲憤慷慨の精神や革命的な雰囲気は、このアコラース教授を通じて兆民に伝わったのではなかろうか。このようなフランス体験が、帰国後、板垣退助を指導者とする自由民権運動に活躍するにあたって、大きく役立ったのである。そして、この自由民権において、やはり同郷の友人で同志である馬場辰猪と微妙な交遊を結ぶのである。

馬場辰猪は、一八五〇（嘉永三）年、土佐国中島町西詰（現高知市升形）に、父馬場来八、母、虎の長男として生まれた。同郷で、やがて親交を結ぶ中江兆民より三歳若年である。兆民の家柄は下級の武士階級出身という点で、辰猪の家とは異なる。辰猪の父來八は、惣領職を召し上げられたが、元治元（一八六四）年、兄源八郎が

家督を相続したときには、一九〇石小姓組の家格であった。歴然たる上士の家柄であり、封建時代ではまったく交流のない隔絶した両家のはずであった。馬場家に降って涌いたような災難が襲ったのは「御陣屋ゆすり」という事件であった。

元治元年四月、藩主山内豊範に従って、禁裡の護衛隊の一員として、大坂の住吉にあった土佐藩の陣屋に駐屯していた兄馬場源八郎は、いわゆる禁門の変の鎮定後、他の藩の兵士たちは続々帰国しているにもかかわらず、土佐藩兵にたいしては一向に帰国の命令が出されず、これを憤った土佐藩兵たちは、住吉の陣屋を破壊し、源八郎もこの行動に加わっていたという事件である。源八郎は家禄を召し上げられ、四万十川以西への放逐を命じられたのである。そして辰猪が家督相続者として、七人扶持、切府二十四石を与えられたのであった。

しかし青少年時代の辰猪は、兆民を知らなかったらしい。互いに相識ったのは、馬場が慶應義塾で福澤の教えをうけていた頃と思われる。明治二十一年十一月一日、フィラデルフィア、ペンシルヴァニア大学病院にて死去した辰猪について、兆民は同年十一月十日の『東雲新聞』紙上に、「弔馬場辰猪君」という追悼文を載せているが、そのなかで馬場との交友についてつぎのように語っている。

「君、維新前江戸ニ出デテ英学ヲ修メ、余モ亦維新前長崎ニ留マルコト一週年余ニシテ江戸ニ赴ク。当時、君ハ福澤先生ノ門ニ在リ、芝新銭座ノ塾ニ寓シ、余ハ村上先生ニ従フテ深川佐賀町ノ塾ニ入リ、時々鍛冶橋ナル土佐藩邸ニ往キ、君ト相見テ相話セリ」(17)。

慶応二（一八六六）年、十六歳のとき、藩命により、蒸気機関学修業のため、江戸留学を命じられ、福澤塾に

入り、英語を学んだが、やがて長崎に留学を命じられた。しかし馬場は藩命にもかかわらず、蒸気機関学にはあまり興味がもてなかったようで、明治二（一八六九）年、慶應義塾に再入学、あらためて福澤諭吉の指導をうけることとなった。馬場にとって生涯の師との運命的な出会いというべきであった。

一八七〇（明治四）年、やはり藩命により、馬場辰猪は真辺戒作、国沢新九郎、深尾貝作、松井正水とともに英国に留学した。その後、一八七二年、岩倉使節団の英国滞在の折りに、法律学修業を願い出て許可され、同時に藩留学生から政府留学生に切りかえられた。この間の経緯については、『馬場辰猪自伝』に詳しく物語られているので省略し、兆民との関係について追究してみよう。ただ兆民との関係についてふれるに先立ち、辰猪が早くも福澤諭吉の下で英語を学習し、この巨匠を通じてヨーロッパ渡航の前に、その市民社会を理解しようとする態度を確立し、従って西欧文明を摂取しようとする熱い願望を抱いて渡航したという事実は、その秀でた天性の資質と品性の故に、洋々たる政治的あるいは社会的将来を約束するが如くであったろう。しかし同時にそれは諸刃の刃ともなるものであった。

馬場が英国に滞在した一八六〇年代は、俗にヴィクトリア黄金時代と呼ばれ、保守党を率いるディスレーリ（Benjamin Disraeli）と、自由党の総帥グラッドストン（William Ewart Gladstone）が、選挙法改正などの政策をめぐって対峙し、交々政権を交替することによって、古典的な議会政治の時代を出現させた。この輝かしい時代に辰猪がテンプル法学院に通い、法律を学んだことは、やがて祖国日本の政治的状態の立ち遅れを強烈に意識させることとなったことは自然であり、さらに彼は基本的人権の問題[18]に強い関心をもつようになった。同時にこのように議会政治の発達しつつある英国が、厖大な植民地を統治し、日本のような後進国にたいしては弾圧的な態度をとり、例えば、安政の条約にみられるように、日本は関税自主権を喪失していることに大きな疑問

を抱き、後にその改正運動に努力することとなった。[19]

馬場は、英国で議会を傍聴したり、また小野梓等とともに日本学生会を組織し、後に日本において、共存同衆という啓蒙団体結成の基盤をつくった。明治八年六月再度、渡英、十一年、同僚真辺戒作と口論の末、負傷させるという偶然の事故により警察に拘留され、ミッドルセックスの裁判所で執行猶予の判決をうけ、帰国を余儀なくされた。五月十一日に、横浜着、その後、彼の精力的な活動が始まるのであるが、その帰国以前に、辰猪は、兆民をパリに訪ねている。

中江兆民がその弔辞のなかでのべているように、辰猪は中江兆民とは同郷の親友であった。性格的には相反するかにみえる二人ではあったが、哀切をきわめた兆民の文章には、友人としてよりは同志としての感慨が豊かである。

「君性厳重ニシテ、諸生タル時ヨリ衣服刀履儼然トシテ少モ屁児帯風ノ不作法有ルコト無シ。余ハ不作法ノ極点ナリキ。但余ハ此時ヨリ君ヲ頼母敷キ人ナラント思ヒタリ。……但容貌ナリ被服ナリ性行ナリ著々反対ニテ、君ハ美麗ナリ余ハ醜陋ナリ。君ハ鮮整ナリ余ハ乱雑ナリ、君ハ方正ナリ余ハ疎放ナリ。君ハ英学人ナリ、余ハ仏学人ナリ、但此著々対蹠的ノ世界ニ在リナガラ、余ハ常ニ後年必ズ相共ニ手ヲ握リ、深語シテ中庭ニ散歩スルノ日有ラント思ヒタリ」。

後に考察するように、この二人の同郷人は互いに相敬し、相求めながら、必ずしも肝膽を照して国事を談ずる機会には恵まれなかった。兆民が長ずることわずかに三年、本来ならば同世代人として志を同じくしていた二人

は、自由民権運動を中心に、共に手を携えて獅子奮迅の闘いを行うべきなのに、兆民の願望にもかかわらず、必ずしもそうはならなかった。ここに福澤諭吉の有名な辰猪を悼む弔詞がある。

追弔詞

「今を去ること凡そ三十年、馬場辰猪君が土佐より出でて我慶應義塾ニ入学せしときハ、年十七歳、眉目秀英、紅顔の美少年なりしが、此少年唯顔色の美なるのみニ非ず、其天賦の気品如何にも高潔にして心身洗ふが如く、一点の曇りを留めず。加ふるニ文思の緻密なるものありて、同窓の先輩に親愛敬重せられ、年漸く長ずるニ従って学業も亦大ニ進歩シ、後英国ニ留学して法律学を脩め、帰来専ラ政治上ニ心を寄せて多少の辛甘を嘗め、其学識雄弁ハ敢テ争ふ者なくして、自から社会ニ頭角を現わしたれども、時勢尚ほ未だ可ならずして、君の伎倆を実際ニ試るの機会を得ず、明治二十年再び航して米国に遊び居ること一年ニして病に犯され、客中不帰の客と為りたるこそ天地と共ニ無窮の憾なれ。……」[20]。

福澤諭吉と兆民の文章によって、辰猪の才能および人柄は想像するに難くはないが、それにしても兆民は、福澤諭吉とともに、辰猪とどのような運命を共有したのであろうか。兆民の弔詞文にあるように、

「既ニシテ君ハ倫敦ニ遊ビタリ、余ハ一年許後レテ仏蘭西ニ游ビタリ。既ニシテ余偶マ事有リ、英国ニ赴キ君ヲアルフレット、ストレートの寓居ニ訪フ。君余ニ問フテ曰ク、君ハ如何ナル『ホテル』ニ居ルヤ、余答テ曰ク、『チャイリングロース』ニ在リ。君曰ク、夫レハ不廉ナリ、余ノ寓居ニ来ラバ君ノ為メニ費ユル

コト無シ、如何ト。余本ト窮人ナリ、洋行セザル前固ヨリ窮人ナリ、洋行中固ヨリ窮人ナリ。君ノ此一言有ルヤ、即日旅館ヲ払フテ、アルフレット街ニ移リ、夫ヨリ日々君ニ誘ハレ、或ハ『ハイドパーク』公園ニ至リ、或ハ劇場ニ或ハ割烹店ニ或ハ書庫ニ一週許日ニシテ略ボ倫敦見物ヲ了ハリタリ」[21]。

辰猪の兆民にたいする友情と兆民の馬場にたいする敬愛の感情が伝わってくる文章ではなかろうか。

「余ハ君ニ先〔立〕ッテ帰朝セリ。

其後明治ノ何年ニテ在リケン。君モ亦帰朝シテ東京ニテ相会セリ。倫敦ヨリ共ニ胸中ニ蓄ヘタル巴山夜雨渭樹江雲ノ情ヲ時々西総ノ下ニ紓セリ……」。

外国での留学体験中に感じた感慨が、そのまま帰国後も持続するとは限らない。

「君今逝ケリ。余ハ頑健ニテ後レタリ。君ト相談ス可キ事有ト思ヒナガラ、未ダ曽テ一タビモ此相談ス可キ事ニ出逢ハズシテ、君逝ケリ。君モ亦余ニ相談ス可キ事モ有リタランニ、君逝ケリ。茫々タル哉。嗚呼余ハ此ニ至リテ天帝ノ有ルコトト、霊魂ノ有ルコトト並ニ其不滅ナルコトヲ信ズルコトヲ得度ク思フナリ……」。

ロンドンの宿舎で将来を誓い合ったかにみえた兆民と辰猪は、帰国後はさまざまな情況に左右されて、充分には

肝胆相照らしえなかったことを、この一節は物語っている。

(12) 前掲、「兆民先生」『全集』第八巻、三三頁。
(13) 前掲、三三頁。
(14) 立命館大学編『西園寺公望伝』第一巻、一九九〇年、岩波書店、二一二頁。
(15) 前掲、第一巻、二三〇～二三二頁。
(16) 井田進也『フランスの兆民』一九八七年、岩波書店、をみよ。
(17) 中江兆民「弔馬場辰猪君」『馬場辰猪全集』第四巻、岩波書店、一九八八年、三四四頁。但し、句読点は引用者のもの。なお、馬場辰猪についての優れた伝記的研究として、萩原延壽『馬場辰猪』(中公文庫)は必読の文献である。
(18) 前掲『馬場辰猪全集』第二巻所収。「天賦人権論」(明治十五年)を参照。
(19) 拙著『英国外交官の見た幕末日本』平成七年、吉川弘文館、二六六頁参照。
(20) 前掲、第四巻、三六九～三七〇頁。
(21) 『馬場辰猪全集』第四巻、三四四頁。

四、自由党と馬場辰猪

馬場辰猪にとって福澤諭吉は恩師であり、同時に恩人でもあった。中江兆民にとっても板垣退助は恩人であり、同志でもあった。兆民は板垣退助や後藤象二郎の推挙により、フランス留学の機会をえたが、彼がフランスで体得したものは、いわゆるフランス民権思想、急進的な共和主義思想であったことは、すでに指摘したところである。帰国後、兆民は、明治七(一八七四)年、文部省報告課御雇となった。

兆民はその後、東京外国語学校の校長なども経験しているが、彼ははじめ、官界に職を求めたのである。こう

した態度は、背後に郷党の指導者ともいうべき後藤象二郎や板垣退助等の推薦によって、その地位が保全されているという意識を抱いていたことは充分に考えられる。その意味で、兆民もまた薩長勢力とならぶ土佐派勢力の恩恵をうけていたのである。

一方、馬場辰猪は、二度目の英国留学から帰国後、共存同衆を中心とする啓蒙活動に従事し、その後、師福澤や森有礼等が明治十三年に結成した交詢社の常議員となり、やがて明治十四年の政変ののち、自由党の結成に参加し、ここで指導的な役割を果すとともに、福澤や板垣との関係で複雑な交錯を示すのである。福澤は馬場を、自己の有力な協力者として、将来の慶應義塾を担う俊才として、大きな期待を抱いていたのではなかろうか。再び追悼文を考察しよう。

「君ハ天下の人才にして其期する所も亦大なりと雖も、吾々が特ニ重きを置て忘るゝこと能はざる所のものハ、其気風、品格の高尚なるニ在り、学者万巻の書を読み、百物の理を講ずるも、平生一片の気品なき者ハ遂ニ賤丈夫たるを免かれず。君の如きは西洋文明学の知識ニ兼て、其精神の真面目を得たる者と云ふ可し。吾々ハ天下の為めニ君を思ふのみならず、君の出身の本地たる慶應義塾の為めニ特ニ君を追想して、今尚ほ其少年時代の言行を語り、以て後進生の亀鑑ニ供するものなり。君の形体ハ既に逝くと雖も、生前の気品ハ知人の忘れんとして忘るゝ能はざる所にして、百年の後、尚ほ他の亀鑑たり。聊か以て地下の霊を慰るニ足る可し。明治二十九年十一月二日　福澤諭吉　払涙記[22]」。

しかし馬場は、慶應義塾において恩師の期待を担って後進の指導にあたる道を選ばなかった。英国での体験は、

明治の変革を実験しつつある祖国の前途に、えもいわぬ不安を感じながら座視するに任せなかったのではなかろうか。

明治十年代は、自由民権の時代であった。フランスから帰国した新知識として、中江兆民がこの運動に無関心でありえなかったことは云うまでもない。しかし、一月に元老院権小書記官を辞して、ひとりの自由人となった兆民ではあったが、自由党結成にむけて郷党の指導者、自由民権運動の大立物、板垣退助が、彼の恩人であったことからすれば、思想的な立場はともあれ、無関心で傍観することは許されなかったのである。

フランス民権派として、急進的共和主義運動を体験した兆民は、本来ならば馬場辰猪のような熱情をもって、自由民権運動に接したのではないかと考えられるが、必ずしもそうではなかった。初期の著作をみると、彼は政治家ではなく、学者＝啓蒙家従ってあるいはジャーナリストとして生きようとしていた。[23] この点が、政治家としての経綸に情熱を燃やす辰猪とは異なり、むしろ馬場の恩師福澤に近い立場を、初期にはとっていたと思われる。

いま、この自由民権の時代を考えるに、この運動に深く関係した人々を結ぶいくつかの線を思い浮かべることができないであろうか。たとえば、㈠福澤諭吉と馬場辰猪、㈡板垣退助と中江兆民および植木枝盛、㈢大隈重信と小野梓などである。この三つの系列には自由民権運動をはさんで、幕末・維新の世代と明治世代との師弟関係、その同志ともいえる親和協力の関係、しかし他方において明治の変革が展開するなかで、次第に深まっていく世代間の対立相剋、縦の関係とならんで、福澤、大隈および板垣という三人の巨星の織り成す複雑な関係がみられる。

福澤諭吉が馬場をいかに高く評価し、その将来を嘱望していたか、さきの追悼の文を俟つまでもなく、つぎの明治七年十月十二日付書簡に現われている。

「益御清安被成御座奉拝賀。此度、小泉、中上川、龍動(ろんどん)え罷越候。差向、何と申執行の目的も無之候得共、私(ひそか)に朋友共に相謀るに、方今日本にて兵乱既に治りたれども、マインドの騒動は今尚止まず、此後も益持続すべきの勢あり。古来、未曾有の此好機会に乗じ、旧来の惑溺を一掃して新しきエレメントを誘導し、民心の改革をいたし度、迚も今の有様にては外国交際の刺衝に堪不申、法の権も商の権も外人に犯され、遂に如何ともすべからざるの場合に可至哉と、学者終身の患は唯この一事のみ」。

まことに、国歩艱難というべきか、先覚者福澤諭吉の現状にたいする不満と将来にたいする憂いが、犇々と読む者に伝わってくるような文章である。俊才、馬場辰猪にたいする期待は高まらざるをえない。

「政府の官員愚なるに非ず、又不親切なるに非ず、唯如何ともすべからざるの事情あるなり。其事情とは天下の民心即是なり。民心の改革は、政府獨りの任にあらず、苟も智見を有する者は、其任を分て自ら担当せざるべからず。結局我輩の目的は我邦のナショナリチを保護するの赤心のみ。此度二名の欧行も其萬分一のためなり。着(ちゃく)の上は必ず御相談も可致、御周旋被下度候。傳習帰りの生徒も多けれども、帰国の其モーメントより一文の銭なし。遂には銭の為に思はぬ言行を犯す者もなきにあらざるよし。

右の外委細の事情は両人より御承知被下度、日本の形勢誠に困難なり。外交の平均を得んとするには、内の平均を為さゞるを得ず。内の平均を為さんとするには、内の妄誕を拂わざるを得ず。内を先にすれば外の間に合はず、外に立向はんとすれば内のヤクザが袖を引き、此を顧み彼を思へば何事も出来ず。されども事

の難きを恐れて行はざるの理なし。幾重にも祈る所は身體を健康にし精神を豁如ならしめ、飽くまで御勉強の上、御帰国、我ネーションのデスチニーを御担当被成度、萬々祈候也[24]」。

福澤のこの愛弟子にたいする萬腔の信頼を溢れさせている書簡である。しかしその後、辰猪が帰国して共存同衆の運動をおこし、あるいは福澤や森有礼等の交詢社の建設に参加していた頃の書簡は、まことに簡素で、數もきわめて少ない。明治十三年六月二十九日、福澤の馬場に宛てた書簡[25]では、明治会堂建設について、相談、協力を要請しているのみで、格別注目すべきことは何も書かれていない。

また、その後数年経った明治十七年五月二十五日の書簡[26]も簡単で、注目すべきものはほとんど記されていない。注目すべき書簡は、明治十九年七月三十一日のものである。全部の文章を引用する必要はないが、これは馬場辰猪が渡米直前に、横浜の米国人商店から爆発物を購入したのではないかという理由で犯人として疑われ、「爆発物取締規則」違反の罪で投獄され、その後、出獄したが、これにたいする福澤の見舞いの手紙[27]である。

福澤の大きな期待にもかかわらず、この師弟が次第に疎遠な関係に陥っていった原因は何か。考えられることは、自由民権運動の過激化があった。

明治十五（一八八二）年、自由党が創設され、その機関紙『自由新聞』が日本最初の政党機関紙として発刊された。社長には板垣退助、幹事として馬場辰猪、末弘重恭、田口卯吉、それに中江兆民が選ばれた。しかしこの新聞には兆民は、非立社系や改進党系の人々とともに参加したけれども、自由党員になったということは明らかではない。しかし馬場は歴然とした自由党員であった。明治六年、いわゆる征韓論に破れて、西郷等とともに参議を辞し、下野していた板垣は、やがて立志社を設立、自由民権運動の立役者となり、明治十四年、北海道開拓

使官有物払い下げ問題で世論が沸騰するなかを、九月十六日、東京に入り、板垣退助歓迎会が催され、沼間守一、中江兆民、馬場辰猪、田口卯吉等がそれぞれその組織および団体を代表して出席し、つづいて九月二十三日の歓迎会では、藤田茂吉、末広重恭、田口卯吉、福地源一郎が主催し、中島信行、西園寺公望、小室信夫、尾崎行雄、豊川良平等四十余名の政・官・財の有力者が参集したといわれる。(28)

興味深いことは、兆民は『東洋自由新聞』に加入しているが、板垣が総理を勤める自由党には入党しなかった。すなわち、板垣の恩顧をうけ、人的脈絡からすれば、当然、自由党に入るべき人物であろう。しかし彼が自由党に入党したという証拠はない。(29) 馬場は、師の福澤が中立の態度をとった自由党に敢えて入党したのは、逆説的ながら、師の訓えにまことに忠実だったからではなかったか。

明治十五年、自由党総理板垣は、後藤象二郎の誘いをうけて、ヨーロッパ諸国視察旅行の企図が提案されたとき、馬場は、その費用の出所が不明瞭であることと、自由党結成直後の重要な時期に、党首が長期間にわたって外国旅行を試みることは好ましくないとして、これにはげしく反対し、板垣と馬場との関係はきわめて険悪なものとなった。結局は馬場の自由新聞社からの排除ということで決着することになる。この事件は、どう考えてみても馬場の主張が正しく、板垣の行動は政治家としてのモラールにかかわるものであったことは云うまでもない。馬場はやはり真に福澤諭吉の最良の門下生であった。

兆民と馬場とは、まことに肝胆相照す間柄ではあった。しかし板垣との長い間の恩顧関係を考えれば、兆民は馬場の立場を支持することはできなかった。ここに「東洋のルソー」の限界があった。いわゆる調停者の役割に終ったのである。明治二十（一八八七）年、兆民は『三酔人経綸問答』を出版、世の注目を集めた。文中の洋学紳士、南海先生および豪傑君それぞれ、著者兆民の分身であるといわれる。しかし、南海先生は福澤諭吉、豪傑

君は兆民自身、そして洋学紳士は、馬場辰猪をもって代表させることができるのではなかろうか。

丸山真男教授によれば、「天保の老人たち」という言葉があるといわれる。一八三〇年代から四〇年代にかけて生まれ、幕末動乱の時代をくぐり抜け、三〇年代で明治維新を迎えた世代である。福澤は、「一身にして二生を生く」と述懐しているが、この人々にとっては明治維新とはまさに革命であり、彼らが若かったときに描いた願望が、この体制変革によって大体において実現されたと考え、明治政権にたいしても、密着する立場に立つ者、一定の距離をおいてその業績を評価する者、その態度は様々であったが、彼らの胸中にはある種の達成感が宿っていることは間違いなかった。福澤をはじめ勝海舟、大隈重信や板垣退助などをみても、このことは理解できるであろう。

これに比べるならば、弘化、嘉永および安政年間に生まれて青少年時代を過した兆民や辰猪は、幕末・維新の変革に身を投ずる機会もなく、すでに体制化した時代のなかで、えもいわぬ違和感を味わった世代に属していた。文明開花の名の下に、おし進められていく大規模な体制変革、制度改変の渦のなかで、精神的にも物質的にも基盤を失った武士階級の叛乱、地租改正にともなって、農村のうけた衝撃、これらは偶然留学の機会に恵まれ、西欧文明の何物であるかを知った若者たちにとって、「近代化とは何か」ということを、深刻に考えさせられる事態であったに違いない。その意味で、「明治」とは、「一国の近代化」をめぐるはげしい世代間の相剋の時代でもあった。

(22) 福澤諭吉「馬場辰猪追弔詞」『馬場辰猪全集』第四巻、三六九頁。
(23) 松永昌三『中江兆民評伝』岩波書店、一九九三年、六八頁。
(24) 『福澤諭吉全集』第十七巻、一七五～六頁。

(25) 『全集』第十七巻、四〇一～四〇二頁。
(26) 前掲『全集』六七二頁。
(27) 前掲『全集』第十八巻、四七頁。
(28) 板垣退助監修・遠山茂樹・佐藤誠明校訂『自由党史』岩波文庫（中）、第三章、大詔渙発と自由党の結党、を参照。
(29) 松永昌三、前掲書、九九頁。

（いいだ　かなえ　本塾大学名誉教授）